

が、わたしは真心からのお祈りをし、施しもいたしたんでございます。神さまはわたしの真心をお認めくださつて、必ずマルグリットさまを御憐みくださるに違ひはありません。息をお引きとりになつた時、眼をとぢましたのも、懺悔の服をお着換へさしたのにも、わたし一人よりほかにとなたもいらつしやらないんですもの。若く美しく不幸な最後をお遂げになられたマルグリットさまを、神さまだつてきつと哀れにおほしめしなされたことでありませう。

二月二十六日。今日はお葬式をいたしました。マルグリットさまのお友だちが大勢おいでになりました。中には心から悲しんでおいでになる方もありました。ですけど棺がモンマルトの墓地へ運はれ行く時、附いて来てくださつたのは、二人の男の方で一人はロンドンから急行でお歸りになれて伯爵と、二人の従者に助けられた老公爵とだけでした。

わたしはいま、マルグリットさまが亡くなられたお室で、暗く悲しいランプの火の下にこの日記の終りを結ぶために、涙の中にペンを走らせてゐるんです。昨日から二

十四時間の間、何一つ戴きませんので、身體がぐつたりとして、気が遠くなるやうな気がいたします。メニイヌさんは食事をこしらへてくれましたが、どうしても食べる気が起りません。

マルグリットさまのお生命が、御自分のものでなかつたやうに、わたしもまたいつどうなるのか分りません。もしさうなると長い間お苦しみになつたマルグリットさまの御心持ちを、あなたさまにお知らせせずにはまふやうなことがあつては大變ですから、すぐあなたのお手もとへお送りいたしておきます。

## 十六

アルマンは、長い日記を一生懸命になつて二度繰返へし讀んでしまふと、息が詰まりさうな堪へがたい苦痛を感じて、そのまゝ日記を胸に抱いたまゝ長椅子の上に倒れてしまつた。彼れは子供のやうに、大聲を上げて泣いた。

彼れの想ひ出されて來るのは、マルグリットがロンドンに立つ前夜、最後にこの室

に訪ねて来てくれたことである。彼奴は激しい發熱の苦痛を忍びながら、愛の證據を見せに來たのであつた。あの夜、彼女はある限りの愛をつくして、自分を抱いてくれた。自分はその夜狂氣のやうに喜びながら、その翌日は醜い嫉妬のためになにもかも忘れてしまつた。さうして卑劣な手段で彼女を苦しめたのである。彼奴は苦痛に堪へかねて、巴里を去つたのである。

さうした恐ろしい罪がどうして許されやうと、アルマンは思つた。もし彼女が許してくれるにしても、自分にはどうしても許される價值がないやうに思はれた。

せめて、臨終に會ふことが出來ないなら、彼女の足下にひざまづいて謝罪をすることが出來たであらうに。父よりも妹よりも、自分を愛してくれた彼女に、あんな無殘な死を遂げさせた罪は、どうしたつて許されやしない。

『マルグリット、おまへは死んだのか、死んだのか、僕のことを思ひながら、僕に手紙を書きながら、僕の名を呼びながら、可哀さうな可哀さうなマルグリットよ。』と、彼れは大きな聲で叫んだ。

彼はまるで發狂したやうな狂亂に落ちて行つた。

アルマンはその翌る日、初めてマルグリットの墓地へ行つて見た。彼女の墓はモンマルトルの墓地にあつた。

時は丁度四月の初めで、歩いてゐると背中にほか／＼とあたたかみ温味を感じるほど、うら／＼かな好い天氣であつた。薄暗い墓地も冬の間のやうに陰氣さは漂つてゐなかつた。墓參に來た人々の姿も廣い墓地の中に、ちら／＼と見えてゐた。

アルマンは墓地の中に入つて行つたが、道は街路のやうに分れて、到底一人では分りさうにもなかつた。

彼れは墓地の管理事務所に入つて行つた。そして、二月二十二日に埋葬されたマルグリット・ゴオチエといふ婦人の墓はどこであるか訪ねると、埋葬帳簿を調べて、すぐ教へてくれた。しかし、案内人を頼まなければ、到底墓場は見當りさうにもなかつたので、墓番を案内に頼んだ。

『君、マルグリット・ゴオチエといふ婦人の墓場は分つてゐるかい？』と、アルマンは

訊ねた。

『分つてゐますとも、あの巴里で有名だつた椿姫とかいふ女でせう。』と、墓番は言つて、『この頃じや墓参する方が一人も見えませんか。椿の花もすつかり枯れちまつたでせう。』

斯んなことを聞くと、アルマンは急に悲しくなつて、思はず滲み出る涙をそつと拭つた。

『君、すまないけど、墓場が埋まるほど椿の花を買つて来てくれないか、それにこれからも毎日上げるやうにしてくださいな。お金は僕の家へ取りに来て貰へばいゝからね。』と、言つて、彼れは住所姓名をあかした。

『ではあなたはお関係の方ですな。みなさんが佛さまのことをそのくらゐ思つてくれればいゝんですよ。』と、言つて、墓番はすぐ椿の花を買ひに行つた。彼れは大きな籠に山ほど花を積んで持つて来た。

アルマンは墓番の後から、恐れるやうにほつ／＼ついて行つた。

垂直に立つてゐる白い墓石の前まで来ると、墓番は『こゝですよ。』と言つて立ちどまつた。

アルマンは、急に悲しみが胸いつぱいになるのを覚えながら、マルグリット・ゴオチエ、とはつきり彫りつけてある大理石の墓石を眺めた。

やがて墓番は、墓石の周圍を綺麗に掃除してしまふと、いま折つて来たばかりの眞紅な椿の花を、墓石も埋もれるほど、まきちらした。いまゝでさびれてゐた彼女の墓は、急に美しくなつた。

『マルグリット・ゴオチエさんもこれで喜んでゐるでせうよ。この墓地にはあの人と同じやうな稼業をしてゐた人もたくさん埋められてゐますが、おまゐりに来る人なんか一人だつてありやしませんからね。わしなんざあ墓場といやあ、どれもこれも可愛いんですよ。わたしどもは佗しくつて他の者を可愛がる暇がないから、佛さまを可愛がるやうになるんですね。』と、墓番はしみ／＼いふのであつた。

アルマンは無言のまゝ墓石をじつと視詰めてゐたが、彼れは急に墓石の前にひざま

づいた。「可哀想なマルグリット許しておくれ。」と、彼れは心の中で言ひつゞけながら番人のゐることも忘れてしまつたやうに、さめぐと泣き入つた。

彼れはやうやく立ち上つたが、墓石の前をどうしても去ることが出来なかつた。どうにかして彼女の顔を、もう一度見たいと思つた。女の顔を見ることは出来ないだらうかと、彼れは思ひ切つて、墓番の親爺に訊いて見た。

『わけないこつですよ。マルグリットさんの遺族の許可を得ればいゝんですよ。警察で立ち合つてくれます。』と、親切に教へてくれて、マルグリットの妹の田舎まで丁寧に教へてくれました。

アルマンはその日すぐマルグリットの田舎へ行つた。そして彼女の妹に會つて、改葬したいからといふことを頼むと、承知してくれて。委任状をくれた。彼れは其處で急に病氣になつて、一週間目に巴里へ歸つて來た。

その翌朝午前九時から、警官立合の上、いよく改葬することになつた。

アルマンが墓場に來た時、墓掘りがもう掘り始めた、警官が二人待つてゐた。墓穴

はだんぐ深く掘りさけて行かれた。アルマンは胸を震はしながら、じつと見てゐたやがて棺は引き上げられた。蓋をとると、屍骸を包んである白衣が露はれた。端の方は肉體に腐りついてゐて離れなかつた。足が一本むき出しに出てゐる。顔の覆ひははがれて、眼は二個のうつろとなつて、唇は形もなく、白い齒がしつかりと結んでゐた。光のない黒髪は、くほんだ頬を覆ふてゐた。さうした傷ましい容貌の中にも、過去の美しい面影が見られた。

『相違ありませんか。』と、警官は訊ねた。

『はい。』と、アルマンは答へたきり、棺の傍にばつたり倒れた。彼れは生きてゐるのか死んでゐるのか自分に分らなかつた。暗い墓穴へ落ち込んで行くやうな氣持ちでゐた。(完)

映畫「椿姫」の解説

## 映畫「椿姫」の解説

舞臺の上に「椿姫」が日本で演ぜられたのは、所謂新派勃興時代はかなり古いことになつてゐるが、映畫劇として輸入されたのも既に久しい以前であつて、佛蘭西のサラ・ベルナルの映畫、伊太利のフランチェスカ・ベルチニー主演のそれが紹介されたことがあつた。文藝映畫の乏しい當時であるから随分珍らしくもあり又尊重されたものであつたが、その後外に「椿姫」が製作されたことも聞かなかつた。伊太利や露西亞の歌劇團が興行される時には、いつも「トラビアタ」の舞臺を見せるので、それによつて、遠い記憶がわずかに甦へされてゐたのだつた

が、ナヂモヴァとヴァレンティノ共演の「椿姫」が上映されたので、「椿姫」の名は再び新しい印象となつて生れた。

名女優故サラ・ベルナルの映畫に就ては、研究材料の發見に困難な程に過去のことになつてゐる。フランチスカ・ベルチニーに就ても殆んど同様で、残された數葉の寫眞によつて、漸くその面影を回想するのに過ぎないのであるが、映畫としても相當の作品であつて、兎に角當時の平凡な映畫に藝術味を教へたといふことが考へられる。伊太利ケーザル主演のそれと、米國メトロ會社製作ナヂモヴァ主演の映畫とは、何れも相異なる特性を持つてゐるので、今後新しき椿姫が製作されても、この二作の名は忘れることが出来ないであらう。ベルチニー映畫に就ては、參考資料の文献に缺けてゐるので、その個々の配役や監督又は演出上の價値に就て言ふことが出来ないのは遺憾であるが、たゞ彼女の彫刻的に整つた南亞型の美しさは、その明るい華やかな表情のうちに、憂鬱な歎きを漂はしてゐて、

ロマンティックな叙情詩的感銘に豊かであると共に、ポーズの美しさは、その大きな型のうちに、洗練された技巧の魅力を湛へてゐるものであつたことを、思ひ出すにはゐられない。

ベルチニーのロマンティックな作品に比べると、ナヂモヴァの演出は、行方が全然リアリステイックであり、心理描寫が繊細になつてゐて、原作を新しい姿に再現し得てゐる。それはジューン・メイシス女史の脚色が、原作を全然現代化してあるので、それだけ寫實的になつて心理的な表現を主眼とした爲でもあると共にナヂモヴァの鋭い繊細なそして大膽な技巧の効果によるところである。「椿姫」のやうな感傷的な性格と單純な主題とを演じた時に、技巧の誇張にも陥らず、また劇的展開がだれることにもならなかつたのは、全くナヂモヴァの優ぐれた表現を立證するものである。鋭く細かな現實感によつて、透明な性格描寫を示すと共に、詩の氣分によつて情調の美を彩る點は、ナヂモヴァ独自の境地であるといふ

ことが出来る。さうした表現に對して彼女は驚くべき程聰明であり、獨創力をこめてゐる。この「椿姫」は全體から見て、映畫劇としてはさまで優ぐれた作品ではないのであるが、たゞナヂモヴァ一人の價値によつて、その全體の存在が高く置かれるといふ批評も決して誇張ではない。ナヂモヴァ禮讚の聲が一層高まつたのも決して不當ではない。

アルマンは、ルドルフ・ヴワレンティノが演じてゐるが、かなりナヂモヴァに抑されて了つたため、劇的興味が薄弱になつたといふことは争はれない。これはナヂモヴァ作品が、常にスターシステムを取るために、彼女ひとりを中心に強め過ぎる傾向があるので、或は監督のさうした意圖であつたかも知れない。ノラにしてもサロメにしても、餘りナヂモヴァの主觀が強調されてゐるので、原作からそれだけの距離が生じると共に、主役を大きくするために、他の人物との交渉が、劇的發展上の力を弱めてゐるといふ傾向を免れない。この「椿姫」にしても、さうし

た行方のためであらう、アルマンの立場が、稍附隨的になつてゐるので、従つてヴァレンティノの他の作品に於けるやうな、鮮明な伎倆が動いてゐない。また一面にはヴァレンティノが、従來心理描寫を主として深刻な表現に努めてゐなかつたといふことが、そこに及ぼしてゐるとも考へられる。何れにしても、その形の上には、流石にヴァレンティノの特徴が見せられてゐたけれど、折角シナリオを現代化した意味に於ける近代的な内部性を示すことに十分でなかつたと云ふことが出来る。

ナヂモヴァの親友であり、ヴァレンティノの妻であり、ナターシャ・ラムボヴァがサロメの時と同じく、背景意匠を擔當して、様式化した繪畫的な舞臺裝置を考案してゐることも、見逃がすことが出来ない。そのうち二三の場面には、劇の内容と調和を缺く點もあつたが、その豊富な美的要素は、ナヂモヴァの表現にふさはしいものであつて、この映畫の印象を綜合化し、氣分を浮び上らせるのに役立つてゐる。

つてゐて、撮影の技巧の効果を補つてゐる。

幾多の俳優のうちで、ナヂモヴァほどに、映畫藝術に對して、信頼と理解とを持つてゐる人は極めて少いであらう。イブセン原作の「人形の家」の如きは、彼女が舞臺で演じて、常に好評を得てゐたので、それを映畫に残して他日の参考の爲めにしたといふ程の意氣と信念とを以て製作したのであつた。(イブセン原作「人形の家」の映畫化されたものには、ナヂモヴァの外に、さきにドロシー・フィリップス主演のと、エルシー・フワーズ主演のと二つがあり、殊にチエホフ夫人の映畫「ノラ」が公開されたことは記憶すべきである。)

「サロメ」を製作してから、彼女は一旦映畫から離れて、舞臺に立つてゐたけれど、フワスト・ナシヨナル社の招聘が餘り熱心だつたので、再びスクリーンに歸ることになつた。エドウィン・ケイリウ監督の下に、ミルトン・シルスを相手役として、「街のマドンナ」を主演したのが、その復歸後最初の作品であつて、従來の



ナチモヴァに、また一つの個性的な色を加へたものであると言はれてゐる。

ルドルフ・ヴァレンティノは、最近の華々しい花形の隨一であつて、最もファンから親しまれてゐることは言ふまでもない。その出演した映畫には、「夜もすがら」「シーク」「海のモラン」「巨巖の彼方」ブース・ターキンソン原作「ボーケール」等と、ブラスコ・イバニエス原作の「黙示録の四騎士」「血と砂」があり「ボーケール」は彼が永らく去つてゐた映畫界に復歸した第一回の作品で、ヴァレンティノにとつても製作者にとつても藝術的並に技術的に成功であると批評されたものであつて何れも大きな人気を呼んだ。最近の作にはニタ・ナルデイ共演の「情熱の悪鬼」(聖者となりたる悪魔)が輸入されてゐる。

従來の彼の特色は、ロマンスの若き王子であつた。鮮かな華かさはあるが、性格表現の内面的な深刻味に缺けてゐる點は、「椿姫」のアルマンの場合に於けるやうに、その弱點であると言はざるを得ない。そのため彼の表現も漸次類型的にな

つて、新鮮味を失ふ虞れがある。昨年妻のナターシャやニタ・ナルデイと、歐大陸劇壇を視察して歸つたから、今後の作には相當の發展が見せられるかも知れない。

### 米國メトロ會社作品 (一九二二年)

原作者	アレキサンドル・ヂユマ・フェイス
脚色者	ジュウン・メイシス
監督	レイ・C・スモオルウッド
装置	ナタアシャ・ラムボヴァ
撮影	R・J・ベクグキスト

## 配 役

マルグリット・ゴオチエ	アラ・ナヂモヴァ
アルマン・デュヴァール	ルドルフ・ヴァレンティノ
ガストン・リュウ	レツクス・チエリーマン
コントドウ・ヴァヴィユ	アーサー・ホイト
ブルデンス	ゼツファイ・テイルブリー
ニツシユツト	バツシイ・ルース・ミラー
ナニイス	エリナ・オリヴァ
オリンブ	コンスウエロ・フロワアートン
アルマンの父	ウキリアム・オルラモンド

フランチェスカ・ベルチニーの名は、今は映畫界から、そのあとを絶つて美しき面影を記憶によつて、喚び起すに過ぎなくなつた。ピナ・メニケリ、エレナ・マコウスカ、マリア・ヤコビニなどや、伊太利映畫の初期を飾つたテリビリ・ゴンザレスと共に、ベルチニーの名は、映畫の歴史を知るものにとつて忘れ難い印象を残してゐる。此頃のやうにフランス又はドイツの文藝映畫が齎らされぬ當時にあつて、伊太利映畫は米國映畫の興味本位、興行價値の爲めの作品に對して唯一の藝術的作品を提供してきた。ベルチニー主演のものも多くは文藝作品を原作としたものであつて、「椿姫」の外に「オデット」及びヴィクトリアン・サルドウ原作の「フエードラ」と「トスカ」などが日本でも上映された。少しく執拗ではあるが、強烈な情熱、深刻な心理表現や、大きな型の美しいアクションは、それらの映畫の特色となつてゐた。然し當時の撮影技巧や監督方法が幼稚であり研究時代であつたので、印象的な手法や音楽的な表現に缺けてゐて、構成も平面的な舞臺的展開に過

ぎず、演出上かなり冗漫な、散文的な感じを與へられたといふことは止むを得ない。「アントニーとクレオパトラ」や「シーザー」又は「クオヴアジス」等のロマンティック・シズムに於て、他の追隨を許さぬ成功を示したと同時に、近代文藝にも相應に開拓の道を通じて、トルストイ原作「復活」を、アンリイ・パタイユ脚色から製作したりした。それはマリオ・セセリニの監督で、カチューシャをマリヤ・ヤコビニが主演した。その外にヤコビニは、トルストイの「生ける屍」にも出演してゐる。「復活」はヤコビニが主演した右のチベル會社作品の外に、米國ではアートクラブト會社製作ボーリン・フレデリツキ主演のものがあつた。藝術に理解あるボーリンのカチューシャは、性格の變化を巧みに表はしてゐたが、監督のテーマに對する把握も足らず他の配役にもよいものがなくて、藝術的價値は優れたものではなかつた。ボーリンは、この外にベルチニーが演じた「フェードラ」及び「トスカ」にも主演して、米國映畫のために藝術的生命の培養に努めてゐた。

大正十四年五月十五日印刷  
大正十四年五月二十日發行

(定價壹圓貳拾錢)

格 姫

編者

久米正雄

發行者

進藤延

印刷者

武居菊藏

印刷所

東京市本郷區眞砂町三十六番地  
日東印刷株式會社

發行所

東京市牛込區  
余丁町一〇五

文藝日本社

電話四谷六五二〇番  
振替東京五八五三四番

◆ 集作傑畫映藝文界世 ◆

■菊半蔵 上等ホプリン布装幀 天金 特製箱入 ■各册約二百頁

■映畫寫真(アート・ムービー)數葉挿入 ■一册價壹圓貳拾錢 送料八錢

■装幀 恩地孝四郎氏

■第一篇 カルメン

メリメエ 作  
田中純氏 編 (刊既)

■第二篇 サロメ

ワイルド 作  
廣津和郎氏 編 (刊既)

■第三篇 椿姫

小チユマ 作  
久米正雄氏 編 (刊新)

■第四篇 冬來りなば

ハツチンスン 作  
大槻憲二氏 編 (刊近)

■以下續刊■

◆ 集選說小篇短代現 ◆

■新四六判 美装箱入 ■各册約二百頁 一册定價壹圓 送料八錢

■第一篇 少女 廣津和郎氏著 (刊既)

■第二篇 晩唱 宇野千代氏著 (刊新)

■第三篇 無禮な街 横光利一氏著 (刊近)

■第四篇 春晝 戸川貞雄氏著 (刊近)

■第五篇 驢馬に乗る妻 川端康成氏著 (刊近)

■以下續刊■

徳田秋聲氏著

短篇集

# 籠の小鳥

四六列上製  
布表紙箱入  
價貳圓參拾錢  
送料拾貳錢

□内容□『籠の小鳥』『花が咲く』等最近の諸作二十數篇を收む

明治大正年間を通じ、日本文壇に燦として珠玉の如く輝くは、我が徳田秋聲氏の短篇小説である。硯友社全盛以來、自然派、自権派、新技巧派等の興亡相繼ぎ、最近にはまた『新感覺派』と稱する一派が現はれ、甲論乙駁、徒らに喧騒を極めつつある間に、一人徳田秋聲氏は、半生を通じて各派の消長をよそに、しかも遠く硯友社時代から現代の新感覺派勃興時代にわたつて、常に文壇に重きをなして來た。惟ふに巨匠は時代を超越し、主義流派の彼方に永生する。徳田秋聲氏の短篇小説は、正に文學道の良心である。良心は永劫不死でなければならぬ。無興味無感激の駄長篇小説に永く倦み來つた一般讀書界は、今や眞實の短篇小説を渴望すること類なる際、小社が茲に氏の名篇『籠の小鳥』外最近の作品二十餘篇を輯めて出版する光榮を得た。願はくは江湖の愛讀を俟つ。

徳田秋聲氏著

長篇  
小説

草

蔓

る

(近刊)

292
168

終

